

立教英国学院通信

第二六七号 二〇一四年七月一二日
発行者 立教英国学院

RIKKYO SCHOOL IN ENGLAND
GUILDFORD ROAD, RUDGWICK RH12 3BE
<http://www.rikkyo.co.uk>

立教英国学院に入学して

高一―二 杉谷 玲奈

私は東京に住んでいました。髪の毛を三つ編みにし、緑色の制服を着て、千葉県にある女子校に九年間通っていました。父がイギリスで仕事することになり、私も父のいる場所で英語や音楽を学びたいと思い、この立教英国学院に入学しました。

前に通っていた学校とは環境が変わり、家族と別れる寂しさや不安でいっぱいでした。でも他の新入生や在校生、先生のみなさんが優しく接してくださるので、安心してこれからこの学院で過ごしていけるのです。

私は将来、歌って踊れるアーティストになりたいと思っています。だから演劇部で練習を頑張ります。

フライングスポーツでは、この学校でしか出来ないと思い乗馬を選びました。プライベートレッスンはギターと英語を選択し、私の将来の夢に近づけるように特技を増やしていきたいと思います。

私は小さい頃にパキスタンに住んでいました。そこでは遠くの教会から自爆テロの音が聞こえてきたり、車に乗っている男の人に窓をコンコンとノックされ、「お金をください。」とお願いされました。今でもその光景が強く頭に残っています。私がパキスタンで通っていた幼稚園では、周りの人がほとんど外国人だったので、コミュニケーション力がつきました。だから、私は立教英国学院で、英語、音楽を学んで将来歌って踊れるアーティストになり、そこ

入学・新学年を迎えて

で得た収入で貧しい人々を助けたいです。私は、小さい頃に学んだこと、立教英国学院でこれから学ぶ事を活かして、人を幸せにできる人になれるよう頑張ります。



赤ネクタイの重み

高三―二 七條 莉奈

春休みが終わる頃、私はずっと赤ネクタイをつけた高三を想像していた。そしていざ帰ってくると、高三のみんなが新入生の案内など自分が任された仕事をしていて頼もしく見えた。

高一のときは、私はクラスの友だちとやりたいことをやりたいようにやっていたように思う。周りをあまり見ず、自分勝手に楽しいことばかりしていた。

高二になって責任のある仕事を任せられ、学校の運営の中心になり学校行事を動かすようになった。例えば体育委員としての球技大会。新入生のチーム分けから体育館・シャワー割り、当日の進行などを行い、とても忙しかったことを覚えている。学校行事は今まで楽しむだけのものだったが、これによって、今までは先輩方が陰で運営してくれていたのだと気づき、感謝の気持ちを知った。それと同時に小さな責任感が生まれた。去年の先輩方が教えてくれたことや残してくれたことをしっかりと引き継ぐという責任と、学校の中枢を担うことに対する責任であったと思う。

そして今、私は高三になった。部長、委員会、係本部などはもうすぐ引退して勉強に励むことになるだろう。しかし高三にも高二とは違う責任がある。始業式の日、私達高三は全校生徒の一番後ろに座った。そこで私は今まで私たちの前で手本となってくれた先輩がいないこと、後輩たちを支えていかなくてはならないことに気付いた。これからは自分達が良い手本とならなくてはならないのだと感じた。そう思うと、青ネクタイより赤ネクタイの方がずっとしんどく感じた。「赤ネクタイは責任の証だ」と校長先生がおっしゃっていた事を心に留めて生活していこうと思う。

―目次―

入学・新学年を迎えて	ページ 1
球技大会	2～3
ミレースクール体験記	4
Japanese Evening	5
ホームステイ	6
Girlguiding	7
現地校との交流	7
ミニ・アウトティング	8～9
部活動を通して	10～11
第3回 チャプレンより	12
コラム	
ブルーベル見学	6
ウィンブルドン テニス観戦	10



球技大会



球技大会

中一 鮎田 忠治

今回、入学後初めての球技大会があり、水色のサッカーへ入りました。色々と分からないこともありましたが先輩達の分かりやすい指導のもと、人生初のゴールキパーをやらせてもらいました。

今までゴールキパーをやったことがなかったので、ワクワクしたけれども、きん張して本番はガチガチでした。いつもはこんなボール、キャッチできるだろうと思いついていましたが、実際、キパーをやってみると、とても奥が深く、なかなか試合中にサボれない職でした。

練習後はいつもドロドロで、真っ黒でしたが、努力がもつと体に付き、そして落ちず、中身から変わって行きました。本番までに一生けん命作ったユニフォームは一生の宝物です。

そして本番やはり努力が足りませんでした。実戦こそ、思いっきりぶつからなければならぬのに、きん張のせいかな、思ったように体が動かずに、止められる所も入れられてしまい、後の祭となってしまうました。このことをバネに、これからがんばります。この球技大会で、百パーセント練習しても、結きよくは六〇パーセントぐらいしか出せない。という事を学んだので、百パーセント試合で力を発揮したいから、百四〇パーセント以上練習しなければ、と思いました。

来年も、もしもやらせてもらえるならば、全力でキパーをやりたいと思っています。

「おつかれさま」

高二― 平栗 義貴

そんな言葉を、得点を集計し終えた直後に委員長に言われた。

二月の中頃からいろいろと準備をしてきて、それが当日を迎え無事に終了した。自習時間を使ったり、ブレイクを潰して話し合ったり、何もかもがとてつもなく大変だった。

球技大会が全校の皆にとつて楽しい思い出になるように、そんなことを言った気もしたが、現実には甘くない。苦手なスポーツをしてもらったり、仲良くない人同士で全体競技のペアを組ませてしまったり、不平や不満がいろいろなところから聞こえてきた。全て投げ出して、球技大会そのものを無くしたいと本気で思ったことさえあった。それでも準備を最後までやり遂げることが出来たのは、委員長のお陰だと思う。

当日の朝、そわそわしながら礼拝の席に座っていた。僕が抱いていた不安はたったひとつだけだ。「ミッシェンサークル」…全体競技のひとつで、僕たちが考えた競技だ。準備に時間がかかることが予想されていた。

ひとつ目の全体競技、五人六脚が終わり、急いで準備にとりかかった。走りまくったが、間に合わない。ほとんどの人が何をしたらいいのか分からず混乱している中、助けてくれた人たちがいた。去年体育委員だった高校三年生と、代表キャプテン達だった。チームをまとめ、僕らが進行しやすいようにしてくれた。それは流石としか形容できず、改めて先輩達を尊敬した。

今年の球技大会で学んだことは、人を頼り、また助け合い、感謝すること。そして、これがどんな仕事を行うときにも大切なものなのではないかと思う。



初めての球技大会

高一一 小林 奈乃子

私が立教英国学院に来てわずか一週間と少しで、球技大会の練習が始まった。運動はあまり得意でなく新しい生活にもまだ慣れきっていない私だったが、学校の雰囲気大会に向けて徐々に盛り上がりつつ行くのを感じて、なんだかわくわくした気持ちになった。

バレーボールやバスケットボールは経験のある、運動好きな人が集まりそうだなと思い、みんなで楽しめそうなドッチボールに参加することにした。しかし、練習が始まると私の考えは間違っていたと思い知らされた。参加者の後輩達の目が皆本気だったのだ。ただボールをよけるだけではない。投げられたボールを受けとめ、そして相手に向かって本気で投げてぶつける。強い信念を感じて、私も気を引き締めて練習に励んだ。

「新入生の先輩」という立場は、少し大変だったが、しっかりした後輩達と、頑張ってくれたキャプテンに助けられ、真剣に練習に取り組むことが出来た。

本番ではいきなりジャンプボールをまかされとても緊張した。練習で相手チームと対戦することは出来なかったのですが、相手の実力が分からず、私達のチームは苦戦した。なんとか頑張つて、一ゲーム勝ち取ったが、午前中の試合は負けてしまった。このまま午後にも負けてしまうのは悔しい…。気合いを入れ直して、午後の試合に挑んだ。昼食後はチーム全体のテンションが上がった状態で試合をすることが出来た。声出しも皆でできたし、真剣かつ笑顔でドッチボールができて楽しかった。

ここまで本気でドッチボールに取り組んだことがなかったので、新鮮な体験が出来た。それぞれ多少の悩みや大変さもあったかも知れないけれど、それを忘れてしまうほど熱中できた、いい試合だったと思う。

結果は引き分けだったが、午後の試合で勝てたことはとても嬉しい思い出になった。

団体競技の楽しさ

高三二 今井 駿汰

テニスやバドミントンと違って、バレーボールは団体競技です。そして僕は団体競技が嫌いです。自分一人の力で勝つことが不可能で、自分が仲間の足を引っ張ることもあるからです。球技大会前の僕は団体競技を、「仲間に迷惑をかけるようにプレーする」という少々堅苦しいものだと考えていました。

その考えが変わることのないまま、僕は球技大会当日を迎えました。全体競技が終わり、いよいよ午前のバレーの試合が始まりました。この時キャプテンのSが「バレーを楽しんでやろう」と言ったのですが、この言葉が大会前と後で僕の考えを変えるきっかけになりました。

結果から言うと、午前の試合は負けました。○対二のストレート負けです。しかし僕は満足でした。なぜか今回の試合は今まで経験したことがないほどに楽しかったのです。初めて団体競技を楽しんだ瞬間でした。

「今まで持っていなかった何かをつかんだ。」そんな気持ちを抱きながら午後の試合が始まり、そして驚きました。そこにいるメンバーは午前と同じなのに、まるで別物のようなチームになっていたのです。普段全く言葉を発さなかったK君は「ナイス！一本！」と叫ぶようになり、「これは取れない」と思った球を後ろのW君が倒れこみながら拾ってくれたりと、全員が、「バレーが楽しい、試合に勝ちたい」と思い、チームがひとつになったと感じました。

精神的な変化は身体的にも思わぬ変化をもたらすと何かの本に書いてありましたが、その後の僕は、練習では一度も成功しなかったブロックが成功したり、今までネットやアウトを連発していたスパイクがほぼ確実に打てるようになったりと絶好調でした。ここで決めたらとつても気持ちがいい、失敗しても仲間がフォローしてくれる、だから自分は安心して攻めに徹することが出来る。そんな気持ちでプレーしていました。

球技大会から三日過ぎた今、団体競技は他人のミスで歯がゆい思いをすることもあられるけれど、一人では達成できないことをチーム全体で支えあい、六人が六人以上の力を発揮できるすばらしいものであると思っています。

バレーの楽しさ、団体競技の楽しさを知った今回の球技大会は、僕の中で忘れられない思い出になりました。

【1学期の行事】

4月13日	入学始業礼拝、避難訓練
4月14日	健康診断、オリエンテーション、ブルーベル見学
4月15日	高等部実力テスト
4月20日	クラブ活動・委員会紹介
4月26日	球技大会
4月27日	聖餐式
4月29日	午後ブレイク
5月4日	全校体力測定
5月9日	Japanese Evening
5月12日、14日	全校歯科検診
5月15日	IGCSE Exam (Biology)
5月16日	ミニ・アウトティング (P5~H2)
5月24日~6月1日	ハーフターム
6月4日	First Certificate in English
6月7日	実用英語技能検定一次試験(準1級、1級)、 Certificate in Advanced English
6月8日	第69回漢字書き取りコンクール、 実用英語技能検定一次試験(2級以下)
6月14日	Preliminary English Test、 Key English Test
6月15日	生徒会主催 ギルフォードショッピング
6月24日~28日	期末試験
6月29日	聖餐式
6月30日	ウィンブルドン テニス観戦
7月1日~2日	答案返却
7月3日	スクールコンサート
7月5日	終業礼拝、生徒帰宅
7月6日~11日	夏期ホームステイ
7月7日~11日	高等部3年夏期補習



ミレースクール体験記

"See You Again!"

H2 Miyu Mimura

春期休暇中、中 3、高 1 の女子生徒が近隣の Millais School での 1 週間の交換留学のプログラムに参加しました。参加者はホームステイ先から学校に通い、授業に参加しながら様々な文化交流の機会をもちました。

I rode on a mini bus, which took me to where Millais students were waiting with great expectations. I looked up to see the familiar broad blue sky, and vast grassland, and overgrown trees through the window with hope for new experience in mind.

At the meeting point, there were faces which we hadn't seen for a while. We hugged each other in delight. Then each of us went to our home for the week. My partner, Phoebe, and I were quiet in a car. I felt somewhat strange and nervous because we hadn't met each other for a while. Her mother, Sally talked to us to fill the silence. We drove through a beautiful colonnade to get to their house. It was a warm, sunny day, and trees cast a light shadow on the road.

This experience during my one-week exchange felt so short. I can remember all events clearly. They are amazing. I can't write about all the events because there were too many amazing events. So I will write about some of the great experiences during my exchange.

First, about Millais School. I felt time went so fast when I was at Millais School. Everything in that school was new and surprised me. This is the reason why time spent in Millais school was so precious for me. I wanted to feel and understand different culture, and therefore I entered this Rikkyo School in England, and applied for this student exchange with Millais. But the time spent at Millais School made me realize how difficult it is to understand another culture. There are not only good things but also some bad things. We were introduced to our partners' homeroom classes. However, the people in the classroom were not so excited to see us. I thought the school did a lot of student exchange in many languages, so we were not special visitors for them.

During the lunchtime in the homeroom class, I found a lot of surprising things for me! They usually had sandwiches and yoghurt for lunch. In Japan, our lunch box at school called bento was prepared by our mums. But in this school, they ate raw vegetables like celery, carrots, cabbage and so on. And most surprising thing was they ate a lot of crisps for their lunch. Usually in Japan, we think crisps are snacks. So I understand Japanese "bento" is unacceptable in England.



Japanese Evening

Japanese Evening とは、英国人に日本の文化を紹介するという行事です。

十年目となった今年は、例年行われている剣道、茶道、書道、折り紙、あやとり、福笑い、箸、日本語、独楽、剣玉、昔あそびに、新しくジブリ作品の紹介と、ふろしきが加わりました。

日頃から交流のある近隣の学校の生徒たちや、英国人の方を招待し、今年は今までで一番多い、約一四〇名のお客様を迎えて、大盛況となりました。会場となったニユーホールにお客様が訪れると、どの企画も自分の企画に来てもらおうと、次々に声をかけて勧誘していました。

また、自分の企画に来てくださった英国人の方には、たどたどしい英語ながらも必死で自分の担当する文化を紹介しました。英国人の方も一緒にあって楽しみ、会場で楽しそうに立教生と笑っている姿が多く見られました。

決して流暢な英語でなくても、「自分たちの企画を楽しんでもらいたい」とそんな意欲に満ち、英国人の方と交流する。

そして彼らの話す「生の英語」に触れる。これこそ本当に生きた英語の実践であると思います。

さらに英語だけではなく、何よりも Japanese Evening は、日本の文化を紹介することを通して、英国人と立教生、イギリスと日本を結ぶ架け橋となっていました。英語漬けになった二時間が終わった後は、「あーもう英語使いたくない!」という声がある一方で、「俺もっと話したかった!」という声もあちこちで聞かれました。英国人の方と共に真に楽しめることができた、そんな一時となった Japanese Evening だったと思います。

Japanese Evening



Japanese Evening

小五 藤原 吏花

五月九日の金曜日、Japanese Evening がありました。

わたしの、参加した企画は、折り紙でした。

練習のときに、立方体の箱を作りました。六つの部品で作る折り紙なので、時間がかかってむずかしくて大変でした。でも、出来上がりを楽しみなもので、がんばれました。ようやく出来上がったときは、きれいに作れたので、とてもうれしかったです。

本番になって、また立方体の箱を作ってみました。練習のときよりも、うまくできるか心配でした。かどとかをきれいに合わせるはずがないようにしたり、あとがつくようにしたりして、どうやったら、きれいにできるか考えて、工夫しながらできました。だから、練習よりもよくできて、工夫したかいがあつてよかったです。

お客様に作り方を教えるときになって、わたしは、カメラの作り方を教えてあげました。そのときに、はしとはしをあわせるように気をつけながらやってみてもらいました。カメラが出来たとき、喜んでもらえたのでうれしかったです。

自分で作った立方体の箱をプレゼントしたら、喜んでもらえて、安心しました。がんばって作ったものをとてもよろこんでもらえたので、作ってよかったと思いました。

イギリスの人に、日本の文化を教えた分、かっでもらうと、とてもうれしかったので、来年の Japanese Evening も、イギリスの人たちに、いろいろな日本の文化を知ってもらって、広めてほしいと思いました。



来年 2015 年に日本で第 23 回世界スカウトジャンボリーが開催されます。先日本校で開かれた第 10 回 Japanese evening の催しに、ホーシャム地区からイギリス代表となった 3 名のスカウト隊員が来校、一足早く日本文化を経験しました。来学期には、総勢 36 名のスカウト隊が本校を訪れ、翌年の日本でのジャンボリーに備えて本校生徒と交流します。以下に、Japanese evening の際、引率として来校したスカウト隊リーダーからのお礼の手紙を紹介します。

Just wanted to say a big thank you for inviting us to the Japanese evening on Friday, the pupils were extremely polite and welcoming. We thoroughly enjoyed ourselves. The three Jamboree Scouts I took are even more excited about their trip to Japan next year - in fact I wish I was going with them! They can't wait to tell the rest of their Jamboree Unit when they next meet.

Thank you again

Kind regards

世界スカウトジャンボリー代表来校

ホームステイ

ホームステイ

高二― 田中 美帆

ハーフターム開始日は、太陽が燦々とし夏らしい天候であった。けれど、ハーフターム中は生憎の天気であると予報では言われていた。

私達は、ホーシヤムへ五人でホームステイをしに行った。五人という大人数を受け入れてくれた人は、なんと一人暮らしのお婆さんであった。立教生五人に対してホストファミリー一人であつては、食事中に日本語が出てきてしまう。部屋は広いし、気軽ではあつたけれど、本来のホームステイの目的は、休息を取る事だけではなく、英人の方々と会話し、その文化に触れる事だと思ふ。そこで私は、夜お婆さんのところへ行き、「時間はありますか？」と聞いて、「はい。」という答えが返つてきた時には、「どうしたの？」と心配してくれていたが、私がただ英語の練習をしたいという旨を伝えると、快く引き受けて下さった。

お婆さんは絵画が好きなのであつた。絵のことは全くわからない自分は、ナショナル・ギャラリーへ行つたときのアウテイニングの葉などで学んだ知識をフル活用して話した。それから話は飛び、家族の事や日本の事、ある日には政府の話まで出てきた。政府の話は、民主的だの何だのと難しい単語も多かったが、辞書を使い何とか理解する事が出来た。お婆さんとの話は、三〇分という短い時間の時もあつたが、自分から話す事も沢山あつた。

時にアクセントや文法が違えば親切に教えて下さり、学ぶこともたくさんあつた。とても楽しく充実したハーフタームであつた。



ホームステイ

高三― 東山 瑞季

ステイ先に着き、物がぎつしり詰まつたスーツケースを、ホストファミリーに手伝つてもらつてどうにかこうにか部屋まで運び入れた。一段落したところで、リビングのソファに座つて紅茶を飲んでみると、一人の小さな男の子が母親に連れられて挨拶をしに来た。

私が

「ハロー」

と言うと、その男の子も恥ずかしそうに口を開いて自己紹介をしてくれた。辛うじて聞き取れたのは、

「ボンジュール」

だけだつた。

フランス語だということとは分かるが、何を言っているのかは全くわからない。ホストマザーのアンさんに、彼が甥っ子でフランス語しか話せないこと、次の日にはフランスに帰つてしまうこと、彼の名前がアレクサンドロだということを聞いた。正直その時は、私も英語すらよく話せるわけでもないのに、英語が全く通じない相手とどう接したらいいか分からなかつた。

アレクサンドロは最初とてもシャイな

ブルーベル見学

高3-2 中村 瑛里佳

あたりは見渡すかぎり青いブルーベルの花畑が広がっていた。私にとって最初で最後のブルーベル見学に、私は乗り気ではなかつた。ちょうど前日に体調を崩したうえ、友達には行くほどのものではない、体調が悪いならやめておけと忠告されたのが大きな原因である。しかし、一人でドミトリーに残って休んでいることに抵抗を感じたため、ブルーベル見学に行くことにした。森へはまだ行ったことがなかつたため、山道が苦手な私には不安があつた。まだ森に入っところはきれいな植物はなく、期待もだんだん薄れていってしまった。

五分ほど歩くと、突然、目の前に広大なブルーベルの花畑が広がった。ブルーベルは一つ一つは小さな花だが、数え切れないほどの花が広がったその光景に私は目を奪われた。全体が青いじゅうたんのようで風に花畑全体が揺れると、

絵本の中の世界にいるような気分になった。花からはかすかに甘いにおいが漂ってきて春の美しさを五感すべてを使って感じる事ができた。

今までこんなにたくさんの花を見ることがなかつたので、ブルーベル見学に行けたことにとっても感激している。あの花を見ないという選択をしていて、写真だけを見ていたら、きっと後悔していたであろう。この学校でブルーベルを見られるのは今回が最初にして最後である。このようなすばらしい体験ができたことを嬉しく思う。



男の子のようだったが、次第に私たちに心を許してくれたようで、いろいろなものを見せてくれたり、一緒に遊んだり、次の日の朝には起きたばかりの私たちのベッドの上で暴れまわった。犬が「シヤン」、猫が「シヤ」、蝶が「パピヨン」だということも、彼が教えてくれた。文章で話されると、終始彼が何を言っているのかわからなかつたが、それでも私はアレクサンドロとコミュニケーションをとっていた。フランスに帰る時、私たちともつと遊びたいと駄々をこねたのは、仲良くなれた証拠だと思ふ。

アレクサンドロに会つて、私はお互いに言葉が通じなくてもコミュニケーションはとれるし、仲良くなれるのだということに気づいた。私は、英語の中でスピーキングが大の苦手だ。通じなかつたらどうしよう、文法を間違えたら恥ずかしい、と考えてしまひ、どうしても口数が少なくなつていた。でも、フランス語の相手とここまでコミュニケーションがとれたのだから、きちんと勉強している英語ならもつと簡単はずだと、今回のホームステイで自信を持つことができた。これからはもっと積極的にコミュニケーションをとってみようと思ふ。

毎週木曜日の夕食を他の生徒たちよりも早く終え、中学一年生と小学生女子は地元のガールガイドズの活動へ参加しています。英語の勉強は始めたばかりという子もいますが、言葉の壁を乗り越え英国の同世代の子たちの中へ入りさまざまな体験をしています。

一学期は、屋内でテントの張り方を学んだり、おかしをつくったり、また、キャンプ場や公園、パブリックフットパスでの活動もたくさんありました。ハイキングで鹿の群の前を歩いたり、公園の池でカヤックをしたり、イギリスの大自然の中で英国の子どもたちと貴重な経験ができています。

今学期最後の活動はキャンプ場でのクッキング。期末試験中の中学一年生は参加できませんでしたが、まずは、みんなで協力して木を拾い集めます。グループごとにたくさん木を集めたら、手際よく組み立てていきます。「次はこんな木」とベテランの地元の子は英語とジェスチャーで立教生に優しく教えてくれました。太い木から細い木へと子どもたちだけできれいに組み立て、そこに火をつけます。しばらく火が燃えるのを見守り、弱まったところにアルミホイルで包んだピザを入れました。「どんなものができあがるのだろう」と待つこと数分、きれいに焦げ目のついたピザが完成しました。できたてで熱々のピザを冷ましながらみんなでおいしくいただきました。



Girlguiding



ました。「学校で夕食食べてきたから、お腹いっぱいです」と活動前に言っていた子も残さず食べることができました。自然の中で仲間と共につくったピザは特別だったようです。

二学期はどんな活動があるのでしょうか。今から楽しみです。今後もイギリスの大自然を楽しみ、少しずつ同世代の英国の子たちとの英語をつかったコミュニケーションも増えていくことを願います。

現地校との交流

地元の学校との交流を積極的に行っています。ここでは、交流先の学校からいただいたメッセージを紹介します。



It was really nice of you to teach us Japanese numbers how to count to ten. Thank you for coming to our school. We had lots of fun.



I met lots of new friends in my group and I wish we could maybe keep in touch. I liked the chopstick part!





チャーチルの生家ブレナム宮殿と、
オックスフォードへ



五月一六日（金）いよいよ待ちに待ったアウティングの日です。天気は見事なまでの快晴。コーチに乗り込み、さあ出発です。小学生と中学生は、かの有名な大政治家ウィンストン・チャーチルの生家でもあるブレナム宮殿と、オックスフォードへ行きました。

お昼頃ブレナム宮殿に到着。門をくぐると、大きな湖とその上にかかるヴァンブラの大橋に皆自然と「おおっ」「わぁ」と感嘆の声が漏れます。

宮殿に入る前にまずは腹ごしらえから。途中で寄ったサービス・エリアで買ったランチを持ってピクニックです。ナイフとフォークで食べる食事の良いけれど、青空の下で芝生の上に座り、手づかみで思い切り頬張るランチはまた格別です。食事の後は、宮殿のガーデン内にある大きな迷路へ。最初は「迷路なんて子供っぽい」などという声も聞こえてきましたが、いざ入ってみる

とこれがなかなか抜け出せません。皆汗だくになりながら迷路内を駆け回りました。お腹もいっぱいになり迷路でひとしきり遊んだあとは、機関車に乗って宮殿へ。ガイドさんの説明を聞きながら、豪華絢爛な宮殿の中を見学しました。皆壮麗な内装に目を奪われ、説明を聞く表情は真剣です。映画の撮影に使われたなどの裏話も聞くことができ、充実した時間を過ごすことができました。

宮殿見学の後にはオックスフォードへ。お楽しみのショッピングの時間です。お小遣いを握りしめ、めいめいお目当てのお店へ向かいます。ディズニーのアリスグッズ販売店 Alice's Shop、アイスクリーム店、クッキー屋さん。オックスフォード大学のパーカーを買った生徒もいました。夕飯もオックスフォードで。マクドナルドに行ったりカフェに行ったり班ごとに自由に過ごしました。日本食屋で久しぶりの日本の味を満喫した生徒もいたようです。

夕方、オックスフォードを後にして学校へ。友人たちと一緒にたくさん遊び、学び、素敵な一日となりました。皆さん、おつかれさまでした！



ウィンザー城訪問

高校二年生の五月一五日は、高校生活最大のイベントの一つ、IGCSEの試験の日だった。長い間勉強を続けてきた試験が木曜日に終わって、翌日はアウティング。

「気がかりな試験が終わってから行けるって本当にうれしい！」

ぎりぎりまでノートを見直し、生物の英単語を確認し、模試を解いて解いて粘った試験勉強。試験終わってアウティング、本日に晴れ晴れとする。

行き先は、午前中は女王陛下の週末の城ウィンザー城、午後はロンドン也。アウティング・デイは今年一番の夏日となった。気温は二〇度までぐんぐんあがって、ウィンザー城で衛兵交替を見る頃には、みなシヤツ一枚になってゆく。ふさふさの黒い帽子（ベアスキン帽）をかぶった衛兵は見るからに暑そうだが、誰も暑そうな顔はしていなかった。汗ひとつ流していない。さすがは輝ける大英帝国の衛兵。

ちなみにこのベアスキン帽。カナダ生まれの熊一頭をつかって帽子をひとつ作るのだ。衛兵は、警護兵と楽隊で構成されるということも発見した。「女性の衛兵が何人もいる」と女生徒たちがガヤガヤ。意外だ。二一世紀に生まれた子供たちにとって女性の進出はもっと身近で一般的だと思っていたのに。彼らが社会人生活に慣れてリーダーシップを発揮する頃、もっと女性の衛兵が多くなるに違いない。彼女達が働く世界ももっと女性が活躍しているだろう。

ウィンザー城内（厳密には城内と礼拝堂はワークシートを使って、ポイントを抑えて見学する。

ワークシートがあると、『謎解き』のよう

ったのは何だったろう？

◇ウィンザー城修復費の捻出がきっかけで、バッキンガム宮殿が一般公開されたこと？

◇ウィンザー城がもう千年もの歴史を持つ建築物であること？

◇トラファルガー海戦でネルソンを死に至らしめた銃弾？

◇「MDCCLXXIX」ヨーロッパ風の西暦表示が読めるようになったこと？

◇緑色のクジャク石でできた杯が自分よりも大きかったこと？（ロシア皇帝から贈られたものだ）

見学とは新しいものを発見することだ。新鮮な驚きを得ることだ。高二年生の印象に何が残っただろう？

午後ロンドンに移ってからの、一時間半のウォークラリーはちよっと大変だった。先生たちが知恵を絞ったウォークラリー観光。ヒントを元に次々に場所を探し当てるのだ。

はじめの『首相官邸ポイント』は皆が一斉にやってきた。ダウニング通り十番地。その辺の人に英語で聞くよう伝えてあったこの住所。ロンドンっ子なら誰でも知っている。

先生からもらったクイズも意外にすらすら。だいたいキャメロン首相の名前は知っていたし、彼の顔もわかった。（ただし、ジェームズ・キャメロンとデイヴィッド・キャメロンにはみごとに引っかけがあった）

ところがなかなか見つからない、『ローマ人と戦ったブリテン島の女王ポイント』と『三つのヒントを元に場所を探し当てるミレニアムポイント』。

首相官邸近くは警備員のいる建物が多いから、ちゃっかり警備員をつかまえて尋ねる生徒たちもいた。天気の良い中、あちこち探し回って「せくせんせいい、みいっ

けた」と走る生徒たち。

ラストポイントは、全ポイントで1つずつヒントを貰って探す『ナイチンゲール像ポイント』。「疲れた」と文句言いながら嘆きながら、わいわい探して歩き回ったウォークラリーは、忘れられない出来事の一つになるだろう。

この日、ウィンザー城には女王旗がひるがえていた。姿は見られないけれども、在位六〇年以上にも及ぶエリザベス女王と同じ場所にいた一日。

天気がよくて暑くて、ロンドン内を駆け回った一日。思い出のページにくっきり刻まれたことだろう。



ウィンザー城に行つて

高二― 佐藤 果歩

「高二にもなってお城！」これが、アウティングでウィンザー城に行くとき聞いた時の私の素直な感想だ。だから、行く前もなんだか憂鬱な気分だった。しかし、コーチの窓からウィンザー城の外観を見た瞬間、テンションが一気に上がった。想像していたよりも、遥かに立派な城だった。

コーチを降りて城に入るとすぐに衛兵交代のセレモニーを見た。バッキンガム宮殿の衛兵交代は柵と柵の間に顔を入れて遠くからしか見られないのに、ウィンザー城では至近距離で見ることができた。衛兵は黒く長いベアスキン帽をかぶり、赤と黒の長袖長ズボンを身にまとっていた。真夏のような日差しが照りつけるアウティング日和で、見ている私は今すぐにセーターを脱ぎたいと思うくらいなのに、衛兵はもの凄く険しい顔をしてピシバシと動いているのを見て感心した。セレモニーが終わると衛兵と写真を撮った。先生が、彼らは任務中だから笑わないとおっしゃっていた通り、まったく笑わず、撮った後に溜め息までついていて。暑さと多勢との写真撮影影でお疲れのようだった。

ウィンザー城を見渡すと、一際高いラウンド・タワーが見える。この日はこのタワーの上に旗が揚がっていた。これは、エリザベス女王がこの城にいますよ、という印だそう。女王は普段、バッキンガム宮殿とウィンザー城のどちらかにいるそう。この日、そう遠くない距離でウィンザー城の美しい緑や建物、清々しい空気を女王とともに味わえたかと思うとなんとも特別な気分になった。



イギリスでのサッカー生活

高三 岡田 元希

小学一年生から中学三年生まで、僕はずっと野球をやってきた。高校・大学でも野球を続けるつもりでいたし、それしかないと思うていた。だが人生はそう予想通りにはいかない。僕は今イギリスの学校に通い、中学三年生の秋からサッカーを始め、三年の月日が流れ、高校生活最後の試合、そのピッチ上に立っている。全て三年前の自分が予想だにしなかったことだ。事の発端は、この立教英国学院に来たときまでさかのぼる。

どの部活に入ろうか。イギリスに来たばかりの僕が一番の悩みはこれだった。野球がないし、他に得意なスポーツもない。まるで闇の中に突然放り込まれたような気分だった。そんな僕を先輩が誘ってくれたのと、同学年にサッカー部が二人いたという理由で僕はサッカー部に入部した。この選択は、僕のイギリス生活を大きく変えていった。

初心者の僕はもちろんチームで一番下手だった。それでも下手は下手なりに練習に食らいついていった。野球を始めたばかりの頃以来の経験だった。そして、チームにゴールキーパーがいなくて、キーパーっぽい体格をしているという二つの理由から僕はゴールキーパーという重要な役割を任された。日々の練習は上手くいかなくて、つらくて、苦しかった。それでも良いプレーができたときに仲間の笑顔が見られたから、自分の中で何とも変えることのできないう達成感があったから、僕はサッカーを続けてこれた。

そして、僕は最後の試合を迎えた。高校生活最後の試合は、勝って笑顔で終えたかった。だからこそ、いつもの倍以上に緊張して足が震えていた。今までの自分を全て出そうと意気込み、試合開始のホイッスルが鳴った。二点リードで前半を折り返し、

後半。相手にフリーキックが与えられた。ゴールに向かって弧を描いたボールは僕の手から弾かれたと感じたときにはもう、相手がゴールにボールを押し込んでいた。自分のミスだと地面を見つめたその時、「気にすんな！ここからだろ。切り換えていこうぜ！」

という仲間の声が聞こえた。その声のおかげで僕は冷静になれた。絶対に後悔したくなかったからその後も全力で声を出し、一生懸命にプレーした。そして僕は、三対一というスコアで勝つことができた。

自分の想像していた未来とは全く違うけれど、僕はこの三年間を後悔していない。自分が今までやったことのないスポーツを高校生活の中でやり遂げたということ、これ以上はない仲間たちとの最後の試合を勝利で飾れたということ、サッカーを全力で楽しめたということは、僕にとって最高の宝物となった。そして最後に、今まで一緒にサッカーをやってきた仲間に僕は心からの「ありがとう」を伝えたい。

部活動を通して



ウィンブルドンテニス観戦

中3 吉川 由望

私がこの学校へ留学しなければ一生でウィンブルドンへ行く機会はなかったと思います。前日の就寝は9時前、そして起床は4時半という立教生だけでなく学校全体が力を入れている気合が入っている行事なんだと実感しました。私もここに来る前からテニス好きの友達にウィンブルドンのことは聞いていたので、まさか私がその場に行けるとは思ってもいなかったのも、とても楽しみでした。

いつもだったらまだ起床すらしていない時間から、長い列に小5から高3の先輩までがそろって並び、前日に高2の先輩が詰めて下さったパックドラランチを食べたり、アイスを買に行ったりなど、並んでいる時間は思ったよりも早く過ぎてゆきました。



校長先生がおっしゃったように今回は雨の影響で日程がずれ、見ることはできず、私たちが行った日に見ることができました。いつもテレビで見ている錦織選手を間近で見ることができ感動しました。昼食は芝生で食べ、天気が良かったのでとても気持ち良かったです。

午後は天気が崩れ、試合が中止になったりと予想外なことが起こりましたが、全然知らなかったテニスのことを知る良い機会になりました。期末試験が終わり日本へ帰る日が近づいてきました。日本にいる家族や友達に良いお土産話ができそうです。



剣道

高二―田中 絢菜

私はこの前はじめて剣道の試合に出ました。

この試合は唯一の高三の先輩の引退試合でもありました。行われたのは、ロンドン付近のスポーツセンター内にある、わかば道場というところです。私達がスポーツセンターに着き、お昼ご飯を食べていると、竹刀ケースらしい物を持った、私たちの二、三倍は大きいおじさん達が見え、かなり不安になりました。

いざ着替えて道場へ向かうと、そこは普通の体育館コートでした。立教つてちゃんとした道場があったてすごいのかもしれない、と思います。準備体操の前に、みんな雑巾がけ競走をするそうです。ちっちゃい子にまざって剣道部全員で参加しました。終わった後に気持ち少しひきしまった気がしました。その後は大人も子供も一つの輪になって準備体操をします。外国人特有のかわいい「いちにいさんしいごおろくしちはち」でしたが、その割に気合が入りすぎていて、少し面白く思いました。

その次に、お互いの先生があいさつをし、試合開始。公式なものではなく、親睦試合だと聞いて少し安心したけれど、それでも試合です。

一試合目は、小さい男の子とでした。体格が私よりはるかに小さいので、勝てる！と思いました。先一本とられてしまいました。その後、一本取り返せましたが、安心と焦りで体が急に重くなり、引き分けになってしまいました。

二試合目は、一試合目より少し背の高い女の子でした。さっきの男の子も、この女の子もそうですが、とにかく前に来て面を打ってきます。試合では、自分からいかないと打てないんだと自覚し、とにかくがむしやに面を打ちました。観客の人は、一本入っても入らなくても、打てば拍手をし



てくれます。私は二本目が入って勝ちが決まっても気付かず面を打っていました。礼をした後に、体がどつと重くなりましたが、心はとても軽かったです。何より先輩に、とってもきれいに面が入っていたよ、とほめられたのが一番嬉しく思いました。試合の後は合同稽古をするのが剣道のしきたりです。

試合には参加しなかった大人の方々や、有段者の人達に稽古をつけてもらいました。皆さんそれぞれ私の弱点を見抜いて、親切に教えてくれました。その後は、試合と同じ形式の稽古をいろいろな人とする稽古。あえて打たせてくれる人、一方的にこてんぱんにしてくれる人、交互に打ってくれる人、と様々でした。部活の時よりずっと大人数としたのに、私は楽しくて全く疲れを感じませんでした。スポーツをして心から楽しく感じたのは、はじめてかもしれません。

引退まであと一年、この試合で感じたことも生かしてまだまだ成長していきたいと思っています。

涙の引退試合 バレーボール部

五月一七日土曜日。立教英国学院バレーボール部は、四時間目が終わるとすぐにミニバスに乗り込みました。行き先はEggs@2nd。毎学期に練習試合を行う顔なじみの学校ですが、今回はいつもより気合いが入ります。それもそのはず、今日は高等部三年生の引退試合なのです。この日のためにバレーボール部は忙しい学校生活の合間を縫って練習に励んできました。

会場は屋外で、慣れない芝生の上での試合です。幸い天気は曇りだったため、暑すぎることも眩しすぎることもなくゲームを進めることができました。実力はほぼ互角、一点取れば一点返される。男女ともに緊迫した試合が続きました。

結果、男子チームは一敗してしまい準優勝となりましたが、女子チームは見事優勝することができました。女子チームには、主催のEggs@2ndから盾が授与されました。

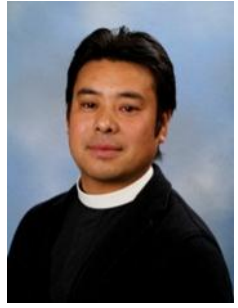
「勝つことはできなかったけれど、一年間このメンバーでやってこれてよかった。みんな、ついてきてくれてありがとう。」試合終了後、そう語った男子キャプテンの目には涙が浮かんでいました。

女子の方では、後輩から先輩に引退記念品が手渡され、対戦相手のメンバーも含めて記念撮影が行われました。

次の試合からは新チームで臨むことになります。新キャプテンの下、これまでのチームに負けないぐらいバレーボールに楽しく取り組み、素晴らしいチームになってくれることを期待しています。



チャプレンより



林チャプレンは立教英国学院の学校付き牧師です。礼拝や聖書の授業にはさまざまなお話をさせていただきます。

人間の品格

チャプレン 司祭 林 和広

四年に一度のワールドカップがブラジルで開催され、世界中が注目しています。各国代表がプライド、誇りを持って戦い、熱戦が繰り広げられています。選手たちのプレーだけでなく、選手の振る舞い、サポーターの振る舞いなどがメディアに取り上げられるときもあります。その国の選手、サポーターの品格というものに目が注がれます。



チャプレン(学校付きの牧師)として本学院に来てから、立教英国学院生としての品格、プライドという言葉に耳にします。振り返れば、自分が高校生や大学生の頃も「我が校の生徒としての品格、プライドを持つて」という言葉を何度も聞いていたように思います。数年前には品格ブームで様々な本が出版されていたことを思い出しますが、本学院の生徒に求められている品格とはどのようなものなのかを自分なりに思い巡らしてみます。

Pro Deo et Patria(プロ・デオ・エト・パ

トリア…神のため、世界のために)。これは本学院の生徒たちのブレザーの胸にある校章に刻まれている言葉です。これは日本の立教学院の教育理念を示す言葉です。Pro Deoとは直訳では「神のために」となりますが、この言葉が歴史的に「普遍なる真理のために」という意味を有していることから、立教学院では知の遺産を受け継ぎながら、常に真理を探し求める人を育てることを目的としています。そして、Pro Patriaとは直訳すれば「国のために」となりますが、この言葉を「私たちの世界、社会、隣人のために」ととらえ、この世界、社会の隣人に愛し、共に生きることのできる人を育てることを理念としています。この理念の土台にあるのは、一人ひとりが神に愛された存在であるというキリスト教の精神であり、キリスト教に基づく全人教育を掲げている本学院もこの精神を大切にしているのであります。

私はチャプレンとして聖書の授業も担当しています。ほとんどの生徒がクリスチャンではありませんが、小学部から高等部までの全ての学年にこの授業があります。受験科目でもなく、全く馴染みのない「聖書」の授業を受ける生徒はどのような気持ちで受けているのだろうか、そして、一日の中の貴重な五〇分を頂いて「聖書」の授業をするにあたり、何を学ぶか、ということとは本学院に派遣されることが決まった時からいつも考えていることです。静かに聖書を読んだり、「キリスト教と映画」と題して映画を見て、視覚を通してキリスト教、歴史を学んだり、キリスト教の靈性に基づいて書かれた著作を読んだりしていますが、これらの学びを通して、生徒が学んで欲しいことは、一人ひとりが尊く大切な存在であるということ、そして、大きなビジョン、広い視野を持つて生きることです。本学院は真の国際人を育てることを教

育理念の一つとして掲げています。そのために様々な知識、語学力を習得するために必死で学んでいます。これらは国際人になる者として重要なものです。それに加えて大切な素養とは、広い地平でこの世界を見渡せる目と、他者を認め、大切に想う心だと思っています。国際人とはつながりを構築する人です。知識や語学力だけでは本当のつながりは構築できません。

私自身も生徒との授業を通して、新しく気づかされることがたくさんあります。生徒たちの素朴な質問や疑問や感想によって目が開かれることが何度もあります。授業を通して、私がこれらの素養を身につけるノウハウを教えているのではなく、一緒に探求する時間となっています。

品格とは辞書によれば、人の持つ気高さや上品さという意味を持つそうですが、当然、それは「自分は他のものとは違う」という優越感を持つて振る舞うことではないでしょう。

品格「Dignity」とは、「尊厳」という意味もあります。自分はこの世界を超えた存在によって創造され、愛されている者であるという尊厳を持ち、そして、他者を自分と同じように尊く、愛されている存在であることを認めることだと思います。品格のある人とは、一人ひとりの人間を尊い存在として受容し、つながりを持つことができる人のことだと思います。

本学院の生徒が学問的な知識だけでなく、学院生活における学び、寮生活、スポーツやその他全ての活動を通して、人として最も大切な品格を養って頂ければ幸いです。



着任



4月に6名の先生が着任されました。写真左より、市川公平先生(社会)、齋藤桃子先生(国語)、高野聡子先生(社会)、奥野由香先生(キッチン スーパーバイザー)、梅津静子先生(社会)、佐藤忠博先生(数学)。共に学び良き時間を過ごされますように。

離任



今学期をもって、ラヴグローヴ先生(英会話)、パーク先生(英会話)が離任されます。今までありがとうございました。

立教英国学院通信の電子配信への切り替えにご協力下さい。ご意見、ご感想もこちらへどうぞ。

infodept@rikkyo.w-sussex.sch.uk